解　説

福田　義昭

ユースフ・ザイダーン（Yūsuf Zaydān）はエジプトの古文書学者。一九五八年に上エジプトの都市ソハーグに生まれ、幼少時にアレクサンドリアに移り住んだ。アレクサンドリア大学で博士号（イスラーム哲学）を取得した後、同大学やアレクサンドリア図書館の古文書博物館・古文書センター等で教育研究にたずさわってきた。作家としては、二〇〇六年に刊行された『毒蛇の影』(Ẓill al-Afʿā) が初の長篇作品。本作『アザゼル』（Azāzīl）は二〇〇八年に刊行され、翌二〇〇九年に第二回国際アラブ小説賞を受賞したことによって一躍有名になった。その後も長篇作品や短篇集を発表し続けている。

『アザゼル』は五世紀初めの中東を舞台に、キリスト教神学論争や信仰と懐疑、宗教的熱狂による暴力、宗教と科学（この作品ではとくに医学に代表される）の関係などの問題を扱った作品である。用いられている文体は奇をてらったものではなく、全体として簡素なものであるが、それでいて詩的な表現も随所に見られる。一言でいえば、端正なアラビア語と言えるだろう（それをうまく日本語にできていないのは訳者の力不足であるが）。

作品は「訳者まえがき」と全三十章（三十巻の文書）から成っている。ここに訳出したのは「訳者まえがき」と第一章（第一巻）および第九章（第九巻）である。「二〇〇四年四月四日」付の「訳者まえがき」によると、十年前（すなわち一九九四年）にシリアのアレッポ北西にある遺跡で羊皮紙文書が発見された。文書を書き残したのは四世紀から五世紀にかけて生きた上エジプト出身の修道士「ヒュパ」であり、彼は今でいえば「自伝」にあたるものをエストランゲラ書体のシリア語で羊皮紙に書いていた。また、この文書の余白にはヒジュラ暦五世紀頃におそらくエデッサのネストリオス派に属する無名のアラブ人修道士がナスフ書体のアラビア語でコメントをつけていた。このコメントの一部をも「註」の形で引用しながら、右のシリア語文書をこれまた匿名の「訳者」が現代アラビア語に翻訳したのがこの作品、という体裁をとっている。したがって、ややこしいが、訳文における「訳者」というのは筆者（福田）ではなく、作中の「訳者」を指している。註はわかりやすいように（原註）と（福田註）に分けておいた。

先に本作で扱われている主要テーマをいくつか挙げたが、最初のテーマ（キリスト教神学論争）の中心に置かれているのはネストリオスとアレクサンドリアのキュリロスのあいだに生じた論争で、物語の大きな背景の一つをなしている。最後のほうでは、エフェソス公会議（四三一年）の情報を、ヒュパが聞き及ぶ場面も描かれている。

宗教的暴力のテーマは、キリスト教徒たちの宗教的熱狂が渦巻くエジプトで、まだ残存していた「異教徒」たちが迫害される話が中心となる。そもそも上エジプトにいたヒュパの家族に起こった出来事もそれと関連するのだが、より強烈なのは物語前半のクライマックス、アレクサンドリアでヒュパの愛した二人の女性が惨殺される場面である（抄訳の最後の部分）。一人は海辺で彼を救った（そして彼と愛し合うようになった）オクタヴィア、もう一人は学問上の憧れでもあったヒュパティアである。そもそもヒュパという名前はこの女性から取られている。ヒュパティアの悲劇は史上有名なもので、チャールズ・キングズレーの『ヒュパティア(*Hypatia*)』（一八五三年）など、さまざまな歴史物語や芸術のテーマとなってきた。最近では、彼女を主人公にした映画作品『アレクサンドリア（原題 *Agora*）』（アレハンドロ・アメナーバル監督、レイチェル・ワイズ主演、二〇〇九年／スペイン）がある。この映画のすじとは異なるが、ヒュパティアの悲劇的最期の場面として

は、ギボンの『ローマ帝国衰亡史』（一七七六―八九年）第四十七章に描かれたものが有名で、本作でもほぼそれと同じむごたらしい展開が踏襲されている。

このような事件がきっかけとなってヒュパはエジプトを出てエルサレムに向かい、さらにそこからシリア北部の修道院へと移住する。物語の後半では、その修道院におけるヒュパの生活が語られる。ここでは、ネストリオスや修道院長などさまざまな人物とヒュパの交際が描かれる。また、ギリシア医学を学んだヒュパがさまざまな人々を癒す場面も描かれていて、そうした部分では、医学によって代表される「科学」と「宗教」の関係も扱われている。

結局、ヒュパは境界上の人物と言えるだろう。宗教と科学、宗教と俗世の境界にいる人物である。信仰と懐疑のあいだで苦悩し、神と悪魔アザゼルのあいだで引き裂かれている。物語後半のクライマックスをなしているのは、修道士として男女の性愛を完全に捨てているはずの彼が、天使のような（しかし、考え方によっては魔性の女でもある）うら若き絶世の美女マルタに狂おしく惹かれていく様子である。

作品のタイトルになっている悪魔「アザゼル」は本作では、とりわけ後半から頻繁に顔を出すようになる。ヒュパが異常な精神状態の中で言葉を交わす相手である。「俺はおまえ自身だ」とヒュパに対して言っているが、簡単に言ってしまえば、人間の（悪しき、しかし非宗教的な観点から見ると、それなりに悲劇的でヒロイックな面もなくはない）欲望を形象化したものかもしれない。

この物語の舞台は東地中海一帯におよんでいるが、同時にエジプト人作家による作品だけあって、そこにうかがえるエジプト的要素も興味深い。主人公はエジプト人であるし、物語の前半はエジプトを舞台としているから、当たり前とも言える。エフェソス公会議にいたる当時のキリスト教事情を考えても、エジプトの重要性はあきらかだ。しかし、それにしても、やはりところどころにエジプト人ならではのエジプトに関する記述がある。単純なお国自慢になってはいないところが、この作者の質を示しているが、それでもなお、エジプトのユニークさに対する主観的な思いが表出しているように思われる箇所はある。

それから重要なのは、これがムスリムの学者作家によって書かれていることである。今までも、たとえば同じアレクサンドリアの作家エドワール・アル＝ハッラート（Edwār al-Kharrāt, 一九二六―二〇一五）のようにキリスト教的エジプトを扱う作家はいたが、ハッラート自身がそうであるように、だいたいはやはりキリスト教徒の作家だっただろう。そこへ、ムスリム作家による知的な雰囲気のただよう作品として本作が現れた。しかし、このような物語であるから、エジプトの教会が悪役にされているように感じる読者もいるだろう。実際、この作品に対しては、コプト教会からいろいろと批判がなされており、聖職者が出版した本作への反論本もよく売れたらしい。また、宗教的暴力を描くのなら、なぜイスラームでやらないのか、という批判は当然ありうるだろう。ただ、作者もどこかで言っていたように、これはキリスト教徒とかムスリムとかという問題ではなく、エジプト人自身の歴史として、そして宗教的不寛容一般に対する批判として受け止めるべきだろう。

最後に、本抄訳に使用した版は以下のとおりである。Yūsuf Zaydān, ʻAzāzīl, 14th ed., Cairo: Dār al-Shurūq, 2009. なお、翻訳にあたっては、英訳 Youssef Ziedan, Azazeel, tr. Jonathan Wright, London: Atlantic Books, 2012 も参考にした（この翻訳は二〇一三年に Banipal Prize for Arabic Literary Translation を受賞している）。